

夫婦関係からみたイスラーム女性の地位

—中国甘肅省臨夏市の回族社会を事例として—

金 仙 玉 *

Status of Chinese Islamic Women as Seen in Husband-Wife Relations
in the Hui Community:

A Case Study from Linxia County, Gansu Province

JIN Xianyu

Abstract

In this paper I explore husband-wife relations in Chinese Islamic society, based on a case study of married couples in Linxia City, China's "little Mecca," and then go on to consider Chinese Islamic women's status. Most Islamic families in Linxia city still follow the traditional gender division of labor whereby the husband earns a living "outside" while the wife takes care of housework and children "at home."

Full time homemakers and women employed outside the home expressed different expectations towards their husbands. Most full time homemakers hoped their husbands would "support the family financially," "listen to my (the wife's) views," and "respect me." In contrast, the women working outside the home hoped their husbands would "understand and support my work," "help with housework," and "help with childcare." As for their consciousness as wives, both those working outside the home and those working as full time homemakers reported that a wife should "respect her husband," "cheer up her husband when he is tired from work," "do housework," "be a good life partner," "tell her husband when he has done something wrong." Hui community men hoped their wife would act as a traditional "good wife and wise mother," as follows: "respect me (husband)," "obey me," "do housework," "be earnest about childcare," "look after our parents," "be a kind woman," "make amends generously when she makes a mistake," and "be devoted to her household."

As seen above, in all the four fields of education/culture, employment/work, household/life/health, and public life, the status of Hui women in Linxia city is not high. However, with both the women's own consciousness and the men's support, improvement of Linxia city Islamic women's status may take time but is certainly possible.

1. はじめに

中国は1949年に社会主義政権を樹立してから、国家の基本政策として男女平等が掲げ

られ、女性の社会進出を促進するという女性政策を実施した。仕事に就く際も賃金の支払いの際も女性が不利を被ることがないように、様々な政策の実施や直接的な指導を行ってきた。そのおかげで今日の中国の女性は、結

* 名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程後期課程

婚しても出産しても働き続けることがごく当たり前の生活習慣として身についているといっても過言ではない。今の中国の夫婦関係は、「民主」「友愛」「愛情」といったものを基礎に成り立つ関係へと変化し、「夫も妻も仕事も家事・育児も」という新しい夫婦関係が強調されるようになってきた。

もちろん、上述のような夫婦関係の変化は中国全土で起きたものではなく、都市部で、しかも漢民族の社会で起きている現象だと思われる。中国の農村社会においては、女性が生産活動の主力となり、農村経済の発展のために重要な役割を果たしてきたにも関わらず、男尊女卑の観念が根強く、夫は妻に対して大きな権限を持っている。

周知の通り、中国は9割を占める漢民族と55の少数民族が暮らす多民族国家である。少数民族の大多数は交通が不便である広大な辺境地区に住んでおり、1000年をも超える独自の信仰、風俗、生活習慣を守ってきたため、中国政府の政策が直接影響を与えているとはいえない。そのため、都市部においても中国政府の積極的な女性政策があるにも関わらず、社会進出もできず、家事と育児を強いられる少数民族の女性もいる。例えば、回族¹⁾のようなイスラームを信仰している少数民族は、夫婦間で役割分担や力関係がイスラーム教倫理に基づいて決められており、「男は外、女は内」という風習が今もなお守られている²⁾。

本稿では、このような政治的には中国の中にあるものの、宗教的にはイスラーム社会を形成している回族を事例として中国イスラーム社会の夫婦関係を明らかにし、そこから中国イスラーム女性の地位³⁾について考察したい。具体的には、甘粛省臨夏市における回族

女性の妻としての自覚、回族男性からみた理想的な妻に注目し、考察を進めることとする。

臨夏市の回族を事例とする理由は、次の通りである。「中国の小メッカ」と呼ばれる臨夏市はイスラーム信仰の深い町で、ここに住んでいる回族のほとんどははっきりと自分のイスラーム信仰を持ち、敬虔な宗教生活を送り、更にイスラーム教徒であることを誇りに思い、強烈な宗教意識を抱いているからである。

回族女性に関する研究は新しい研究分野であるため、先行研究は限られており⁴⁾、特に夫婦関係に関する研究はあまり見当たらない。これまでの回族の夫婦関係に関する研究は、皆回族の家族関係の一環として扱われて、家族関係に関する研究のなかで夫婦関係が論述されている。例えば、『中国少数民族婚姻家庭』(厳 1986: 80-91)で、厳は回族の夫婦関係について、「男が外向きを担当し、農業、工業、商業などを営み、家族の生計を掌握する。女は内向きを担当し、家事の切り盛りや子供の世話をする」と論じている。また甘粛省張家川回族自治区の回族家庭の家族関係についての研究では、「夫が大きな権威を持っており、一切の事柄を決めることに對し、妻は発言する権利がなく、黙々と家事ばかりしている」と述べている(馬・虎・張 2004: 152-156)。回族の伝統家族倫理思想についての研究を行った梁(2007: 37-44)は、「夫が妻を養い、妻は家事をこなす、夫の悩み事を分担する。夫と妻は尊敬し合い、愛し合い、常に補助的な役割を果たす」と指摘している。以上の先行研究を纏めてみると、全部「男は外、女は内」という夫婦の間の役割分担について記述しただけで、「男は外、女は内」という役割分担について妻と夫はどう思っているのかについては言及していない。そこで、本

稿ではフェミニズムの視点に即して、回族女性の夫への期待、女性の社会進出⁵⁾と「男は外、女は内」観念についての見方、妻としての自覚について考察する。また、回族男性の妻への期待、女性の社会進出と「男は外、女は内」観念についての見方についても調査を行い、回族社会における夫婦関係を明らかにし、そこから回族女性の地位について考察を行いたい。

2. 調査地の概要及び調査方法

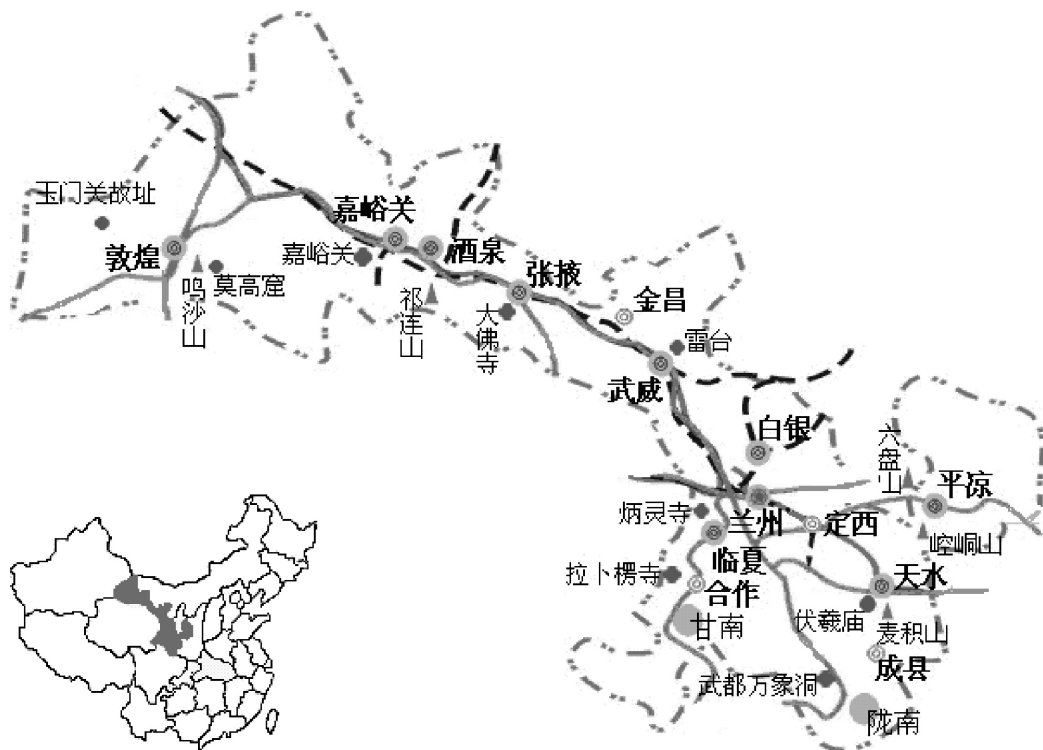
2.1 調査地の概要

臨夏市は甘肅省臨夏回族自治州の県級市の行政中心で、臨夏回族自治州の中部、甘肅省の南部に位置しており（図1参照）、城南街

道、城北街道、東関街道、西関街道、城西街道、紅園街道の6街道と城関郷、罕郷、南龍郷、折橋郷の4郷を管轄している。イスラーム教徒である回族や東郷族が多く住んでおり、長い間「中国の小メッカ」と呼ばれてきた。臨夏州人民政府のホームページによれば、臨夏市の総面積は88.55km²であり、総人口は19万3000人で、人口の約半分が回族である。

臨夏回族自治州の総面積は8169km²であり、一つの市と七つの県すなわち臨夏市、臨夏県、永靖県、和政県、広河県、康楽県、東郷族自治県、積石山保安族東郷族撒拉族自治县からなっている。臨夏回族自治州の地形は高地、山岳、黄土高原からなる。黄河はこの州の北西部の黄土地帯を通り、濁った黄色になる。平均海拔は2000mで、平均気温は8℃である。

図1 甘肅省地図



出所：<http://www.arachina.com/map/gansu/index.htm> (2007年2月18日参照)

無霜期間は年間 155 日に過ぎなく、年間降水量は 442mm で半不毛地帯である。

全州人口は 196 万人で、そのうち回族、東郷族、保安族、撒拉族などを含めたイスラーム教徒が 110 万 5000 人で 56.4% を占めている。イスラーム教徒の中で、回族人口が 61 万人で 55.2% を占めている。

臨夏回族自治区の主要な産業は農業、手工業、建材、金融、水力発電、観光である。2003 年、臨夏回族自治区の国内総生産 (GDP) は 37.85 億人民元 (1 人民元を日本円に換算すると約 15 円程度になる) で、一人当たり GDP は 1931 人民元であり、臨夏市の GDP は 7.72 億人民元で、一人当たり GDP は 3938 人民元である。同年、甘粛省の一人あたり GDP は 5022 人民元であり、全国平均一人あたり GDP は 9101 人民元である⁶⁾。上述の比較から分かるように、中国の経済ランキングで甘粛省は低いレベル (香港・マカオ・台湾を除く 31 の省級行政区の中で 27 位) にあり、臨夏回族自治区及び臨夏市は甘粛省の中でも経済的に遅れているところである。

臨夏回族自治区は自然と文化に恵まれている。州の北部、黄河が流れる永靖県には劉家峡ダムとその巨大な貯水池を有しており、永靖県はまた岩窟仏で有名な炳靈寺への旅の出発点でもある。多数の清真寺 (モスク) と拱北 (スーフィー派の聖者廟) は臨夏回族自治区の至るところで見られる。統計によれば、臨夏回族自治区には清真寺及び拱北を含めたイスラーム教寺院が約 2300 箇所あると言われる。臨夏市だけでも、清真寺及び拱北が 126 箇所ある (馬 2001: 4)。

2.2 調査方法

回族社会における夫婦関係を明らかにする

ため、2005 年 11 月 4 日～11 月 25 日と 2007 年 5 月 3 日～5 月 18 日の二回にわたって臨夏市で現地調査を行った。第一回現地調査では、一般回族家庭に 4 日間宿泊し、夫婦関係について参与観察を行い、また 2 軒の回族家庭を訪問し、夫と妻にインタビューを行うほか、11 人の回族男性と 3 人の回族女性に彼らの職場でインタビュー調査を実施した。第二回現地調査でも、8 軒の回族家庭を訪問し、夫と妻にインタビューを実施し、また、臨夏回民中学の高校一年生の回族家庭出身の学生 300 名に親へのアンケート調査用紙を配り、親の回答を記入した用紙を 5 日後に回収した (回収率は 100%)。調査内容としては、親の基本情報 (年齢、学歴、職業、年収、子供数)、妻は夫に何を期待しているのか、女性の社会進出と「男は外、女は内」観念についてどう思っているのか、妻としてどうすべきだと思うか、夫は妻に何を期待しているのか、女性の社会進出と「男は外、女は内」観念についてどう思っているのかである。アンケート調査の形式はすべて選択の形になっており、親の基本情報、女性の社会進出と「男は外、女は内」観念についての賛成か否か以外は、全部複数選択の形になっている。以下の回族女性の妻としての自覚、回族男性からみた理想的な妻は、アンケート調査⁷⁾、参与観察、インタビューに基づく。なお、下記に出てくる家庭名と被インタビュー者の名前は A, B, C ……で記す。

2.3 アンケート調査における親の基本情報

高校 1 年生の子を持っている親の年齢が 30 歳台と 40 歳台で、特に 30 歳台の親が最も多いことから臨夏市の回族たちは結婚が早いことが分かる (図 2 参照)。臨夏市の回族たち

図2 親の年齢

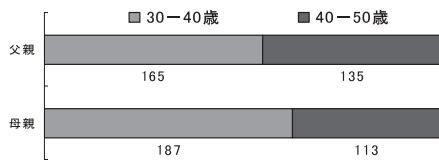


図3 親の学歴

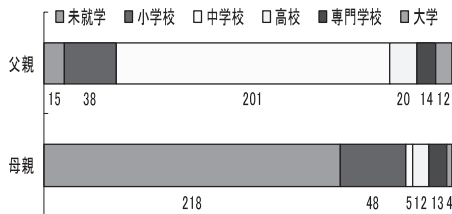


図4 親の職業

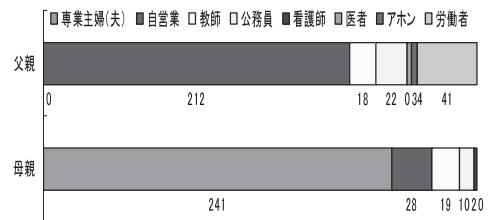


図5 親の年収

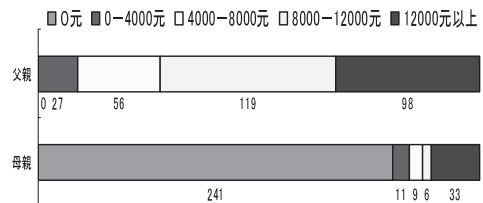
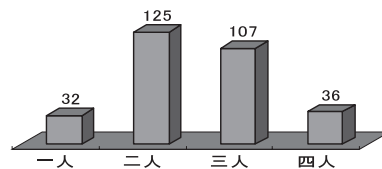


図6 子供数



は、女が十六、七歳、男が二十一、二歳になるとすぐ結婚する。少数の大学教育を受けた人たちの結婚年齢はちょっと遅くなるが、大学を卒業したらすぐ結婚する。親の学歴を見ても、父親の学歴は中学校卒業が主で、母親は未就学者が主である（図3参照）。臨夏市の回族社会では商業を営む伝統があり、教育を受けられなくても商売さえできれば、生きていけるという観念が強く、教育を重要視していない。臨夏市の回族女性たちは経済的貧困と女子教育への軽視などの理由で学校教育をあまり受けられない。親の職業からも分かるように、父親の職業の大多数は自営業で、父親の年収は8000-12000円と12000円以上が主である⁸⁾。臨夏市の回族社会では女性の社会進出が遅れており、大多数の母親は専業主婦であり、収入がない（図4、図5参照）。臨夏市の回族女性の社会進出が遅れている原因は伝統的性別役割分担の影響もあるが、それより教育レベルの低さと関係があると思われる。一つの家庭に子供が二、三人いるのが普通であり（図6参照）、父親一人の力で、4、5人家族を養うことは難しいと思われる。

3. 回族女性の妻としての自覚

アンケート調査における女性調査対象300人のうち、専業主婦が241人で、社会に進出している女性は59人であり（図4参照）、夫への期待は、専業主婦か社会に進出している女性かによって異なっている。専業主婦の多くは夫に「家族を養ってもらう」、「自分の考え方を聞いてもらう」、「尊敬してもらう」を期待しているが、社会に進出している女性は夫に「自分の仕事を理解し、支持してもらう」、「家事を手伝ってもらう」、「育児に参加してもらう」を期待している。そのほか、「自分に従ってもらう」と「家事をすべて担当してもらう」を期待している妻はいない（表1参照）。

表 1 回族女性の夫への期待 (複数回答)

	専業主婦	社会に進出している女性
家族を養ってもらう	239 人 (241 人中)	0 人 (59 人中)
自分の考え方を聞いてもらう	201 人 (241 人中)	0 人 (59 人中)
尊敬してもらう	209 人 (241 人中)	0 人 (59 人中)
家事を手伝ってもらう	0 人 (241 人中)	54 人 (59 人中)
育児に参加してもらう	0 人 (241 人中)	48 人 (59 人中)
自分の仕事を理解し、支持してもらう	0 人 (241 人中)	55 人 (59 人中)
自分に従ってもらう	0 人 (241 人中)	0 人 (59 人中)
家事をすべて担当してもらう	0 人 (241 人中)	0 人 (59 人中)

出所：筆者の調査による

表 2 妻としてどうすべきだと思いますか (複数回答)

	専業主婦	社会に進出している女性
夫を尊敬する	241 人 (241 人中)	58 人 (59 人中)
夫の悩み事を聞いてあげる	241 人 (241 人中)	39 人 (59 人中)
仕事で疲れた夫を慰めてあげる	241 人 (241 人中)	40 人 (59 人中)
家事をこなす	241 人 (241 人中)	42 人 (59 人中)
すべてのことにおいて夫に従う	40 人 (241 人中)	0 人 (59 人中)
夫の間違った所を指摘してあげる	198 人 (241 人中)	53 人 (59 人中)
人生の良いパートナーになる	241 人 (241 人中)	47 人 (59 人中)
お金を稼ぎ、家庭収入を増やす	0 人 (241 人中)	12 人 (59 人中)

出所：筆者の調査による

妻としてどうすべきであるかについては、専業主婦か社会に進出している女性かに関係なく、「夫を尊敬する」、「夫の悩み事を聞いてあげる」、「仕事で疲れた夫を慰めてあげる」、「家事をこなす」、「夫の間違った処を指摘してあげる」、「人生の良いパートナーになる」べきだと思う妻が多い (表 2 参照)。その反面、「お金を稼ぎ、家庭収入を増やす」べきだと思う女性は少数で、夫の収入が少なく、自営業をしている妻の中で見られる。また、「すべてのことにおいて夫に従う」ことについ

て社会に進出している女性は皆否定しているが、専業主婦の中には肯定している妻も見られる。

以上から臨夏市の回族社会では「男は外、女は内」という性別役割分担の伝統がいまなお守られており、多くの回族家庭では夫が家族の生計を掌握し、妻は家事や子供の世話をしていることがわかる (図 4, 図 5 参照)。2005 年 11 月 8 日から 11 月 12 日まで A さん宅でホームステイをしたが、A さんと A さんの長男は青海省果洛藏族自治州でチベット服

装の商売をしており、Aさんの妻と長男の妻は専業主婦で、家事や子供の世話をしていた。「我が家は臨夏市の回族家庭の縮図です」というAさんの三女の話はこの点を一層裏付けている。

臨夏市の専業主婦たちの一日の生活を見ると、食事と睡眠の時間以外は、炊飯、部屋の掃除、洗濯、子供の世話、礼拝などをする事で過ごす。ほとんど家の中におり、外出はしない。日常生活用品は男が買ってくるので、自分の服を買うか、親戚に会いに行く時だけ、外出する。外にあまり出ないため、臨夏市内でも一人で外出すると、道に迷う時がある人もいる。彼女たちは夫が家庭の生計のために外で一生懸命働いているので、自分たちは家事をこなし、子供の世話をし、仕事で疲れた夫を慰めてあげて、優しくしてあげるのは当たり前だと思っている。しかし、お金を稼いでいないことが理由となって、家庭内ではいつも夫の話を聞く立場になり、家計の管理権を握られないケースが多い。「すべてのことにおいて夫に従う」ことについて賛成している妻がいることから、家庭内での自分の受動的な存在に不満を感じていない妻もいるとは思われるが、やはり不満を感じている妻の割合が圧倒的に多く、彼女たちは夫に尊敬され、自分の考え方を聞いてもらうことを望んでいる。

高学歴の一部の回族女性が社会に進出しているが、彼女たちの職業は教師か公務員に集中しており、従事している職種は限られている。彼女たちは仕事を持っているにも関わらず、家事をこなし、夫を尊敬し、夫の悩み事を聞いてあげるような良妻になるべきだと思っている。しかし、社会労働に従事しながら、家事と育児を全部女一人で担当する

ことは難しい。そのため、仕事を持っている女性たちは夫の支持と理解を求めており、家事、育児等を手伝ってもらうことを期待しているのではないだろうか。彼女たちは家庭と仕事の両立を図ることの難しさを知りながらも、仕事を続けようとする。それ程、仕事をするのが彼女たちにとっては魅力的なことなのである。「国の平均給料と比べると臨夏中阿女校の教師の給料は少ないですが、臨夏市では中等水準になります。ムスリム女性として給料をもらえる仕事を持ち、自分の能力を発揮できる場所があることは、臨夏市では自慢のことです。」(臨夏中阿女校のB教師)「仕事が終わった後にも一歳半の娘の世話と家事をしなければならないので、正直に言うとても疲れますが、仕事をやめることは一度も考えたことはありません。仕事があるから、毎日充実した生活を送ることができますし、家族からも尊敬されています。」(和平小学校のC教師)このように臨夏市の回族の働く女性たちは、自分自身の社会進出を誇りとして思っており、自分の仕事に生き甲斐を感じているようである。

女性の社会進出について、仕事を持っている女性はもちろん専業主婦の中でも賛成している人が多い(表3参照)。専業主婦の女性の社会進出に賛成する理由として圧倒的に多いのは「経済的に自立できる」であり、その次が「回りの人から尊敬される」である(表4参照)。ここからは経済的に夫に頼っているため、家庭内で話す権利がなく、回りの人から軽視されている臨夏市の回族専業主婦の現状を分かるだろう。「自分は知識がなく、年も取っているので、外に出て仕事しようと思っていないですが、今の若者は知識を身につけ、仕事を持つべきです。」(専業主婦D)、

表 3 あなたは女性の社会進出についてどう思いますか

	専業主婦	社会に進出している女性	年収が4000元未満の夫	年収が4000元-8000元である夫	年収が8000元-12000元である夫	年収が12000元以上の夫
賛成	194人	59人	24人	34人	104人	41人
反対	44人	0人	0人	21人	15人	57人
無回答	3人	0人	3人	1人	0人	0人

出所：筆者の調査による

表 4 女性の社会進出に賛成する理由（複数回答）

	専業主婦	社会に進出している女性
経済的に自立できる	194人（194人中）	52人（59人中）
自分の能力と知識を生かせる	3人（194人中）	35人（59人中）
社会に貢献できる	9人（194人中）	58人（59人中）
社会的地位が高くなる	14人（194人中）	51人（59人中）
家庭内で発言する権利がある	76人（194人中）	5人（59人中）
回りの人から尊敬される	192人（194人中）	4人（59人中）
社会事情が分かる	31人（194人中）	28人（59人中）
キャリアウーマンに憧れている	1人（194人中）	35人（59人中）

出所：筆者の調査による

「私は教育レベルが低いので、社会に進出できません。もし自分に知識と能力があれば、社会に進出したいと思います。」（専業主婦E）から分かるように、臨夏市の回族の専業主婦たちは教育水準の低いことが原因で、就ける職が限られているため現在は家に閉じこもっているが、教育水準が向上された時には家にだけいようと思われない。また、彼女たちは教育水準が低いから、自分には叶えない社会進出に憧れていると考えられる。女性の社会進出に賛成する理由について仕事を持っている女性は、「社会に貢献できる」、「経済的に自立できる」、「社会的地位が高くなる」、「自分の能力と知識を生かせる」、「キャリアウーマンに憧れている」、「社会事情が分かる」を選んだ人が大多数であった

（表4参照）。仕事を持っている女性のほとんどは高学歴で、彼女たちは経済的自立だけではなく、社会への貢献、地位の向上、自分の能力の発揮、夢の実現などにも目を向けているのである。

一方、少ないものの、専業主婦の中には女性の社会進出に反対する女性が44人いる（表3参照）。女性の社会進出に反対する理由として、「女性の役割は家庭内にある」が一番多く挙げられており、「女性が社会に進出すると、家庭はめちゃくちゃになる」が二番目に多い（表5参照）。どちらも家庭と関連するもので、ここからはイスラームの伝統的性別役割分担の観念が一部の回族女性の頭の中に浸透していることがわかる。また、「社会に進出したら異性と接触する機会があるが、

表5 女性の社会進出に反対する理由（複数回答）

	専業主婦
女性の役割は家庭内にある	30人(44人中)
社会に進出したら異性と接触する機会があるが、それは名誉に良くない	13人(44人中)
社会に出たら流行文化の侵食を受ける可能性があるが、それは信仰に悪影響がある	3人(44人中)
イスラームの教義に違反する	11人(44人中)
女性が社会に進出すると、家庭はめちゃくちゃになる	18人(44人中)
社会に進出するとイスラームの伝統が守りにくい	9人(44人中)
家庭と仕事を両立するのは難しい	8人(44人中)
女性は仕事が終わって帰宅した後も家事と育児をしなければならないが、それは疲れる	7人(44人中)

出所：筆者の調査による

それは名誉に良くない」、「イスラームの教義に違反する」、「社会に進出するとイスラームの伝統が守りにくい」、「社会に出たら流行文化の侵食を受ける可能性があるが、それは信仰に悪影響がある」は信仰と関連するもので、女性の社会進出とイスラーム信仰との間に衝突する所があり、イスラーム信仰への忠誠を守るために社会進出を諦めた女性もいる。例えば、第二回現地調査で出会った専業主婦F氏（26歳）は蘭州大学の修士号を獲得したにも関わらず、卒業した後最愛の人と結婚し、就職することをやめて、家庭に戻った。「主人は回族中学校の教師で、毎月の収入は1500元ぐらいですので、家は経済的に決して豊かだとは言えません。私も働けば家庭の収入が高くなり、臨夏市では豊かな生活を送れると思いますが、私と主人は私の就職を考えたことはありません。女性が社会に出るとイスラーム信仰が守れなく、女性には害が多いです。女性が高学歴を獲得するのは社会進出より、家庭と子供の教育のためだと思います。」

「家庭と仕事を両立するのは難しい」、「女性は仕事が終わって帰宅した後も家事と育

児をしなければならないが、それは疲れる」を選択した女性も7,8人いるが、女性はいくら仕事がよくできるとしても、家事や育児を避けることができなく、働く女性たちは職業と家事の二重負担を背負っているため、疲れてしまい、結局仕事をやめる女性もいる。例えば、専業主婦G氏（臨夏回民中学の元教師）は、仕事・家事・育児の三重圧力に耐えられなく、3年前に仕事をやめたという。家事労働と育児の社会化が徹底的に行なわれない以上、女性の社会進出は難しいだろう。

前述した通り、女性の社会進出について賛成する女性が多い。しかし、「男は外、女は内」観念についても賛成する女性が多い（表6参照）。一見すると、これは矛盾した現象に見えるが、実はそうでもない。臨夏市の回族女性の「女は内」観点についての理解は、女性は家庭内での役割つまり家事や育児などを果たすことであり、家庭内の役割さえきちんと果たせば社会へ進出しても構わないと思っているからである。だから、外で仕事をしているにも関わらず、女性なら育児や家事をこなすべきだと思う女性が多い。「生理的な特徴から見て、女性は育児と家事をすることに

表6 「男は外、女は内」観念についてどう思いますか

	専業主婦	社会に進出している女性	年収が4000元未満の夫	年収が4000元-8000元である夫	年収が8000元-12000元である夫	年収が12000元以上の夫
賛成	222人	29人	24人	54人	117人	95人
反対	19人	30人	2人	2人	2人	3人
無回答	0人	0人	1人	0人	0人	0人

出所：筆者の調査による

向いています。夫に家事と育児をさせてもよくできないので、私が育児と家事を担当しています。」(臨夏回民中学のH教師)「仕事をするかどうかに関係なく、女性なら家事と育児をすべきです。女性の役割は家庭内にあり、家庭内での役割を果たせる場合、社会に進出しても結構です。逆に、家庭内の役割を果たせない場合には、社会に進出したらだめです。」(臨夏中阿女校のJ教師)もちろん、社会に進出している女性の中には「男は外、女は内」観念に反対する人も多い。自分も夫と同様に家庭収入の増加のため働いているのに、家庭内のことをすべて女性一人で担当するのは不平等であると思う女性がいるようである。

4. 回族男性からみた理想的な妻

年収に関係なく、回族男性の妻への期待の多くは、「自分を尊敬する」、「優しい女性である」、「親に孝行する」、「育児に熱心である」、「家事をこなす」、「自分の過ちについて寛大に処理する」、「家庭に献身的である」、「自分に従う」など良妻賢母になることであり、「女強人になる」(女強人とは職場で一定の成果を獲得した強い女性のこと)など強い女性になることを望んでいる男性はほぼいない(表7参照)。妻に「社会に出てお金を稼ぐ」ことを望んでいる回族男性は年収の少ない層で

16人見られるが、自分の低収入で家族を養えない現実からくる期待だと思われる。また、教育レベルが高く、年収も多い層で妻に「知識と能力がある」女性になることを期待する男性が見られるが、それは教育レベルの高い男性は、見聞が広く、妻に対しての期待も高いことが理由であると思われる。「敬虔なイスラーム教徒になる」ことについて多くの男性は望んでおり、イスラーム教への愛着心が見られる。表6からもわかるように、多くの回族男性は妻に「内向き」を期待している。このような、回族男性の妻への内向きへの期待は、イスラームの教えと中国伝統社会の儒教思想による。『クルアーン』の「男は女の擁護者(家長)である。それはアッラーが、一方を他よりも強くなされ、かれらが自分の財産から(扶養するため)、経費を出すためである。それで貞節な女は従順に、アッラーの守護下に(夫の)不在中を守る。あなたがたが、不忠実、不行跡の心配のある女たちには諭し、それでもだめならこれを臥所に置き去りにし、それでも効きめがなければこれを打て。それで言うことを聞くようならかの女に対して(それ以上の)ことをしてはならない」(第4章 34節)と「あなたがたの家に静かにして、以前の無知時代のように目立つ飾りをしてはならない。礼拝の務めを守り、定め

表7 あなたは妻に何を求めていますか（複数回答）

	人数
自分を尊敬する	298 人 (300 人中)
優しい女性である	285 人 (300 人中)
親に孝行する	278 人 (300 人中)
育児に熱心である	269 人 (300 人中)
家事をこなす	252 人 (300 人中)
自分の過ちについて寛大に処理する	243 人 (300 人中)
家庭に献身的である	237 人 (300 人中)
自分に従う	203 人 (300 人中)
敬虔なイスラーム教徒になる	196 人 (300 人中)
知識と能力がある	35 人 (300 人中)
社会に出てお金を稼ぐ	16 人 (300 人中)
女強人になる	1 人 (300 人中)

出所：筆者の調査による

家の者たちよ、アッラーはあなたがたから不浄を払い、あなたがたが清浄であることを望まれる」(第33章 33節)からわかるように、イスラーム初期⁹⁾には女性を家の外で働くことを禁じてはいないが、女性の家庭における役割や義務を強調する傾向にある。イスラーム中期になって、女性の役割は家庭内にあると限定されるようになった。これを裏付けるものは、預言者のムハンマドの死後200年から250年を経て編纂された『ハディース』である。例えば『ハディース』には「あなた方のうちの誰でも群を守る者で、それについて責任がある。イマームは信徒達を守る者で責任があり、男はその家族を守る者で責任があり、妻は夫の家を守る者で責任があり、そして奴隷は主人の財産を守る者で、責任がある」(ブハーリー 1993:741-742)、「あなた方のうちのそれぞれは群を守る者で、それについて責任がある。アミールは守る者であり、

男は家族を守る者であり、そして女は夫の家と子供を守る者である」(ブハーリー 1993:748)とある。

臨夏市の回族男性たちは普段は仕事で忙しいため、『クルアーン』や『ハディース』などを読む時間がないが、金曜日の集団礼拝にはほとんど参加する。「男女は身体構造が異なっており、したがって心理構造も異なっています。女性は男性より子供、親、兄弟などを愛し、家庭への愛着心が強いです。また男性より涙もろく、衝動しやすく、怒りやすいなど、感情的になる時が多いです。このような女性の特徴から、女性は家庭内での仕事つまり家事と育児が合っているとクルアーンでは認識しています。イスラームは女性の社会進出を喜ばないですが、それは女性を保護するためです。」(臨夏清真大祁寺のK阿訇¹⁰⁾)からわかるように、臨夏市の回族男性たちの伝統的性別役割分担観念の形成の多くは清真

表 8 女性の社会進出に賛成する理由は何ですか (複数回答)

	年収が 4000 元未満の夫	年収が 4000 元-8000 元である夫	年収が 8000 元-12000 元である夫	年収が 12000 元以上の夫
経済的に助かる	24 人 (24 人中)	16 人 (34 人中)	0 人 (104 人中)	0 人 (41 人中)
女性も社会的責任を担うべきである	3 人 (24 人中)	6 人 (34 人中)	53 人 (104 人中)	33 人 (41 人中)
女性も自分の能力を発揮すべきである	1 人 (24 人中)	3 人 (34 人中)	59 人 (104 人中)	39 人 (41 人中)
今は男女平等な社会で、男性ができることは女性にもできる	2 人 (24 人中)	4 人 (34 人中)	52 人 (104 人中)	31 人 (41 人中)
女性の地位を高める	2 人 (24 人中)	5 人 (34 人中)	28 人 (104 人中)	20 人 (41 人中)
社会事情が分かる	1 人 (24 人中)	1 人 (34 人中)	25 人 (104 人中)	20 人 (41 人中)
中国政府が奨励している	1 人 (24 人中)	1 人 (34 人中)	10 人 (104 人中)	8 人 (41 人中)
仕事を持っている女性は魅力的である	2 人 (24 人中)	2 人 (34 人中)	10 人 (104 人中)	9 人 (41 人中)

出所：筆者の調査による

寺の阿訇の教えからくると思われる。

また臨夏市は貧困地域で、中国伝統社会の儒教思想が根強く残っており、「男は外、女は内」という習慣が今も存在している。儒教の教えの「三従四徳¹¹⁾」という戒めから分かるように、家庭生活において、権利は男性だけに与えられており、女性には従順と義務だけが要求されている。儒教思想の影響を強く受けている臨夏市の回族社会では、男性は外で働いて家族を守り、女性は家にいて家庭を守り、子供のしつけをするのが当たり前のことになっている。

自分の妻には社会に進出せず、良妻賢母になることを望んでいるものの、広い意味での女性の社会進出について賛成している男性が多い (表 3 参照)。年収が 4000 元未満の男性と年収が 4000 元-8000 元の男性は、女性の社会進出に賛成する理由として、「経済的に助かる」を多く挙げている (表 8 参照) が、女性の社会進出は家庭の収入増加に役に立っていることがわかる。周知の通り、臨夏市は貧困地域であり、一世代の収入は少ない。一人で稼いだお金で家族全員が暮らせないことか

ら、女性の社会進出を認める人もいる。年収が 8000 元-12000 元の男性と年収が 12000 元以上の男性は「女性も社会的責任を担うべきである」、「女性も自分の能力を発揮すべきである」、「今は男女平等な社会で、男性ができることは女性にもできる」を多く挙げている (表 8 参照) が、これは中華人民共和国成立後の中国政府の積極的な女性政策の影響と彼ら自身の経歴と関係があると考えられる。

中国は 1949 年に新政府を樹立してから、男女平等を促進することを基本的国策とし、行政の手段で女性の男性とのほぼ平等的な社会・経済的地位を確立させた。「時代不同了、男女都一样。男同志能做到的事，女同志也能做到」(時代は変わって、男性と女性と同じになった。男性ができることを女性にもできる)、「婦女能頂半边天」(婦女は天の半分を支える)という毛澤東の教えは、長期にわたって中国社会に影響を与え、女性の社会進出は、もはや誰も意識しないほど当然のことになっている。中・高収入の回族男性の大多数は高校卒業以上の学歴を持っており、政府部門や学校や病院などで勤めているので、中国政府

表 9 女性の社会進出に反対する理由は何ですか（複数回答）

	年収が 4000 元– 8000 元である夫	年収が 8000 元– 12000 元である夫	年 収 が 12000 元以上の夫
女性の役割は家庭内にある	18 人(21 人中)	12 人(15 人中)	51 人(57 人中)
社会に進出したら異性と接触する機会があるが、それは名誉に良くない	11 人(21 人中)	3 人(15 人中)	3 人(57 人中)
社会に出たら流行文化の侵食を受ける可能性があるが、それは信仰に悪影響がある	4 人(21 人中)	2 人(15 人中)	3 人(57 人中)
イスラームの教義に違反する	13 人(21 人中)	6 人(15 人中)	7 人(57 人中)
女性が社会に進出すると、家庭はめちゃくちゃになる	10 人(21 人中)	7 人(15 人中)	16 人(57 人中)
社会に進出するとイスラームの伝統が守りにくい	7 人(21 人中)	3 人(15 人中)	3 人(57 人中)
女性が社会に進出すると、男の仕事効率が落ちる	3 人(21 人中)	6 人(15 人中)	11 人(57 人中)
仕事を持っている女性は男の話をあまり聞かない	17 人(21 人中)	5 人(15 人中)	9 人(57 人中)

出所：筆者の調査による

の政策や社会の変動などによく気づき、社会・文化的変化によってすぐ自分の考え方を見直すことができる。女性の社会進出に賛成する理由としての「女性の地位を高める」、「社会事情が分かる」、「中国政府が奨励している」、「仕事を持っている女性は魅力的である」も上述の女性政策と回族男性の個人経歴と関連するもので、中国共産党の女性政策の影響で、黙々と家事ばかりすることではなく、社会事情が分かり、仕事もできる女性に魅力を感じる男性が増えつつあると思われる。

ではなぜ自分の妻の社会進出には否定しているが、広い意味での女性の社会進出について賛成している男性が多いのか。「妻は知識がない（小学校中退）ため、外で働いても何も分からなく、いじめられ易いので、社会に出て仕事してほしくないです。（中略）小学校 6 年生の娘がいますが、将来には大学に入り、またイスラーム国にも留学し、その後には仕事してほしいです。」（清真飯店の L オーナー）からわかるように、回族男性の多くは

自分の妻の教育レベルが低いため社会労働への従事を反対しているが、教育レベルの高い女性の社会進出には賛成している。また、図 2 と図 6 から見られるように、女性調査対象者は皆 30 代か 40 代で、一人以上の子供を持っているため、年齢と家庭環境からみて妻の社会進出に反対している。

女性の社会進出に反対している回族男性は 31% も占めており、女性の 14.67% と比べると人数が多い。男女による反対の理由を比べてみると、男女ともに「女性の役割は家庭内にある」（男性は 87.1%，女性は 68.18%）と、「女性が社会に進出すると、家庭はめちゃくちゃになる」（男性は 35.5%，女性は 40.9%）を選択した人が多い。このことから、臨夏市の回族男女の女性の社会進出に反対する主な理由は伝統的性別役割分担の観念によると分かるだろう（表 5，表 9 参照）。

女性の社会進出に反対する理由を年収によって比べてみると、どんな年収層の男性でも「女性の役割は家庭内にある」、「女性が社

会に進出すると、家庭はめちゃくちゃになる」を多く挙げたことが分かる。男性の年収が高くなっても「女性の役割は家庭内にある」という回答率が高く、その理由として、回答をした男性の多くが学歴が低く、自営業でお金をある程度儲けた回族男性であるということが挙げられる。彼らのほとんどは、学歴が低いことが原因で考え方が古く、封建的である。そのうえ、自分の経済力で家族を養うことができるという現実から女性の役割は家庭内にあると思っているのである。

また、女性の社会進出に反対する理由として、「仕事を持っている女性は男の話をあまり聞かない」、「イスラームの教義に違反する」、「社会に進出したら異性と接触する機会があるが、それは名誉に良くない」という回答があったが、これは同じ低学歴であっても、年収が12000元以上の男性より、年収が4000元から8000元の男性に多く見られた。このことから、同じ学歴の男性の中でも経済的に貧しい男性のほうが封建的で、女性の支配欲が強いことが分かる。

5. おわりに

最近、イスラーム女性の地位に多くの関心が寄せられているが、それはフェミニズムの立場からのアプローチが多い。現代のフェミニズム的視点からみて、イスラーム社会における女性の法的不平等¹²⁾をはじめ、教育や雇用において女性が不利であること、女性が身体を覆うように強制されていること、女性を隔離していることなどは、批判の対象となっている。今まで外部からの批判的な観察者だけがイスラームにおける女性の地位を取り上げたが、近年になってムスリム女性たちがメ

ディアを媒介として自らを語り始めた。例えば2003年のノーベル平和賞を受賞されたシリ・エバディ女史（イラン人）は、イスラーム法学者が指導するイスラーム共和国体制下で、イスラーム法の厳格な施行のもとで女性の地位が制限されていると語り、現代の人権思想に適合した法改正を訴えた（中央公論118(12):32-33）。

中国社会に生きる臨夏市の回族の人々の中には、簡単に離婚すること、女性二人の証言が男性一人の証言と等しいこと、女性の遺産相続が男性の二分の一であることなどの現象は見られない。四人まで妻を娶り¹³⁾、女性の就学と社会進出が遅れており、女性はベールを被っており、女性を隔離する現象は見られるが、ベールを被ることがイスラーム教の影響による以外に、他は単にイスラームの影響を受けたからだとはいえない。中国封建社会の男尊女卑思想、イスラーム社会の男女隔離規則と経済的貧困などの様々な要素の影響で今のような現実が現れていると考えられる。とにかく、本稿が対象とした臨夏市の30・40代の回族既婚女性の地位は「教育・文化」「雇用・就業」「家庭・生活・健康」「公的分野等」の四つのどの領域から見ても低いと判断できよう。二回にわたる現地調査の結果からわかるように、臨夏市の多くの回族女性たちは教育レベルが低く、社会に進出しておらず、家庭内でも夫に従属する立場に置かれている（図3、図4、表6、表7参照）。彼女たちは自ら自分の地位が低いと訴えることはしなかったが、自分たちが置かれている不利な状況を改善しようとしており、そのための教育水準の向上と社会への進出を期待している。なお、女性を外に出させなく、女性を自分に所有させるという一部のイスラーム国¹⁴⁾の

ムスリム男性とは異なって、臨夏市の多くの回族男性たちは女性の社会進出を認めている。臨夏市のイスラーム女性の地位向上は、女性自身の地位に対する自覚と男性の理解によって、長い時間がかかるものの、決して不可能なことではないと思われる。一方、臨夏市のイスラーム女性の地位を向上させていくには、教育レベルの向上を図るとともに、意識面において根強く残っている女性の能力や役割についての固定観念を見直す必要があるだろう。

最後に、本稿は高校生を持つ30・40代の回族女性の状況を反映したものに過ぎなく、回族女性全ての状況にあてはまるものではない。回族女性の全体像を明らかにするためには、今後より幅広く調査する必要がある。

注

- 1) 回族は中国における55の少数民族の一つで、中国最大のムスリム集団である。漢民族の人々と長年生活してきたため、言語・形質等は漢民族と同じだが、イスラーム教を信奉している。人口は2005年の時点で981万6805人であり、壮族、満族に次ぎ、三番目に多い少数民族である(中華人民共和国国家統計局 2006:50)。主に寧夏回族自治区に集中的に居住し、甘肅省、河南省、新疆省、青海省、雲南省、河北省、山東省などの地域に規模は異なるが集中的に居住している。
- 2) 一言で回族といっても、居住地域や家庭環境によって状況は異なっており、すべての回族の夫婦間で役割分担や力関係がイスラーム教倫理に基づいて決められており、「男は外、女は内」という風習が守られているとはいえない。例えば、中国におけるイスラーム伝来史で最も有名な町である福建省の泉州市の回族の人々は、近代的工業文明化の強い影響で信仰を失いつつあり、イスラームの食生活習慣を守り続ける人すら、今では数百人を数えるのみである(張承志 1994:162)。
- 3) 女性の地位の概念規定をめぐることは諸説があるが、ここでは女性の社会(家庭は社会の一部)的役割や女性が所有する社会的資源の布置状態

の中で女性の占める位置であると規定する。女性の地位を構成する領域は、「教育・文化」「雇用・就業」「家庭・生活・健康」「公的分野等」の四つの主要な領域に分類できる。「教育・文化」領域には、識字率や進学率、芸術分野やマスコミへの参加程度などがあり、「雇用・就業」領域には、職業への進出率、女性の就業分野、男女の賃金格差などがあり、「家庭・生活・健康」領域には、共働き、家計の決定権、総家事時間に占める女性の時間比率、平均寿命などがあり、「公的分野等」領域には、政治分野への参加程度、審議会などにおける女性委員の比率などがある。(総務庁統計局 1990:1, 労働問題リサーチセンター 1995:1-5)

- 4) 回族女性に関する研究が限られている原因の第一に、回族研究者のほとんどが男性であり、女性の問題は彼らの興味を引かなかったことが挙げられる。第二に、回族研究自体が活発化したのが、1990年代以後のことで、その歴史が短いことが挙げられる。
- 5) 本来女性の社会進出とは、従来家庭に囚われている女性をそこから解放して、あらゆる社会分野に進出させることを指す。しかし、臨夏市の回族はイスラームを信仰しており、イスラームには女性の働く分野が限定されているということから、ここでの社会進出は女性を全ての社会分野に進出させることを意味することではなく、政府部門、学校、病院などイスラーム教義に合う社会分野に進出させることを指す。本稿では、家庭を社会の一部と見なしていない。
- 6) 中華人民共和国国家統計局『中国統計年鑑 2004』中国統計出版社、2004年、p.53, p.63より
- 7) 本稿は、調査対象者が全て高校生を持つ30・40代の親へのアンケートに基づいており、20代の独身・既婚男女を視野に入れていない点で一定の限界を持っていると思われる。
- 8) 臨夏市は貧困地域であり、平均的年収と平均的年支出額は低く、家庭の年収が4000元になれば、就学者がない3、4人からなる一家族は生活でき、就学者がいる3、4人からなる家族といっても家庭の年収が8000元ぐらいになれば普通に生活できるという。そのため、臨夏市において8000-12000元は中等収入であり、12000元以上は高収入である。
- 9) イスラームの年代区分はイスラーム初期、中期、後期に分けている。イスラーム初期はイスラーム社会の発生から西暦900年頃までで、中

期は各地で多くの王朝が興っては消えた群雄割拠の時代で、後期は16世紀前後からのトルコのオスマン帝国とイランのサファヴィー朝とインドのムガル帝国がイスラーム世界を支配していた年代である。

- 10) 広義にはイスラーム法学・神学に通じる人を示すペルシア語。中国のイスラーム教徒の間では、阿訇は宗務者の位階の一種で、清真寺の教長になる資格を有するものをいう。
- 11) 三従とは「在家従父、出嫁従夫、夫死従子」(嫁に行くまでは父親に従い、嫁に行ったら夫に従い、夫が死んだら息子に従う)で、四徳とは「婦徳、婦容、婦言、婦工」(女性らしい道徳、女性らしい容姿、女性らしい言葉遣い、料理屋・裁縫の技術)を身につけることをいう。
- 12) 例えば、クルアーンが四人までの妻を認めていること、離婚が容易であったり、子供の養育権を男性の特権としていること、法的に女性二人の証言が男性一人の証言と等しいとされていることなどである。
- 13) 中国の法律は一夫一妻を実施しているので、法律上の妻は一人しかいないが、密かに妻を四人まで娶る現象は見られる。例えば第二回現地調査の時、このようなことに出会った。臨夏から蘭州まで行くタクシーに乗った時、途中でタクシー運転手が一軒の家の入り口で止まった。友達から第一夫人への生活費の仕送りの依頼を受けたそうである。彼の友達は現在第三夫人と一緒に蘭州市に住んでいるが、毎月第一夫人、第二夫人に生活費を送っている。第一夫人は40代の若い女性で、現在息子夫婦及び孫と一緒に広河県に住んでいる。夫が第二夫人、第三夫人をもつことに不満があるが、経済的に彼に頼っているため、反対する権利がない。タクシー運転手の話によれば、臨夏市では密かに妻を複数娶る現象は珍しくないという。
- 14) アフガニスタンにおけるタリバーンの女性抑圧政策はよく知られており、保守的傾向の強かったタリバーンは、女性の就業・就学、行動の自由を制限していた。1997年11月、国連事務総長ジェンダー問題特別顧問アンジェラ・キング氏(女性)を団長としてアフガニスタンの女性と女兒の状況調査が行われた。キング調査団の報告によれば、アフガニスタンのジェンダー開発指数は130ヶ国中最低であり、一人の女性が20回以上の出産を経験する例もあり、妊産婦死亡は世界第2の悪さ、女兒の識字率は4%、女性の保健サービスは著しく制限されて

いる。サウジアラビアでは男女が公共の場で同席すること、女性の一人歩き、女性の車運転などが禁止されており、女性の従事できる仕事分野は女子学校や病院などに限られている。

参考文献

- 泉沢久美子. 1993. 『エジプト社会における女性—文献サーベイ—』アジア経済研究所.
- 板垣雄三. 1992. 『新・中東ハンドブック』講談社.
- 今井泰子. 1999. 「女性の社会的・家庭的地位とその歴史的背景—日本・中国・東南アジア等の事例から」『特別研究報告書』97・8: 57-66.
- 丁宏. 2002. 「談回族研究中的性別意識」『回族研究』3: 102-105.
- 于皓. 2004. 「試述《古蘭經》中關於婚姻和家庭倫理的規定」『零陵学院學報』25: 203-205.
- 大形里美. 2003. 「インドネシアにおけるイスラーム家族法とジェンダー」『九州国際大学国際商學論集』14(2): 1-34.
- 関西中国女性史研究会. 2004. 『ジェンダーからみた中国の家と女』東方書店.
- 許堅. 1991. 「中国の經濟改革と女性問題のゆくえ—その地位・役割の變革を中心に」『仏大社会学』16: 17-36.
- 嚴汝嫻. 1986. 『中国少数民族婚姻家庭』中国婦女出版社.
- 蔡漢. 1991. 「中国の家族における女性の地位をめぐって」『社会学雑誌』8: 158-177.
- 塩尻和子・池田美佐子. 2004. 『イスラームの生活を知る事典』東京堂出版.
- 秦均平. 2004. 「家庭經濟与回族兩性地位述論」『寧夏社会科学』6: 53-58.
- 石紅梅・葉文振・劉建華. 2003. 「女性性別意識及其影響因素—以福建省為例」『人口學刊』2: 15-21.
- 総務庁統計局. 1990. 『日本女性の社会的地位』日本統計協会.
- 蘇林. 2005. 『現代中国のジェンダー』明石書店.
- 竹下政孝. 1995. 『イスラームの思考回路』栄光教育文化研究所.
- 中華人民共和國國家統計局. 2006. 『中国統計年鑑 2006』中国統計出版社.
- 張承志. 1994. 「中華文明のなかのイスラーム中国」片倉もとこ編『イスラーム教徒の社会と生活』栄光教育文化研究所: 153-189.

- 張琳, 1992, 「中国における女性の地位と役割の変容- 伝統的女性観と『人民中国』における女性観を中心に」『修大論叢』14: 227-240.
- 土屋紀義, 2004, 「中国のイスラム教徒——歴史と現況」『レファレンス』54(3): 38-63.
- 寺田貴美代, 2003, 『共生社会とマイノリティへの支援: 日本人ムスリマの社会的対応から』東信堂.
- 中川淳, 1974, 『家族関係を学ぶ人のために』世界思想社.
- 服部範子・宮坂靖子, 2003, 「中国・新疆ウイグル族の家庭生活とジェンダー——平成13(2001)年度南疆フィールド調査」『兵庫教育大学研究紀要』23: 35-44.
- ファティマ・メルニーシー, 庄司由美(訳), 2003, 『ヴェールよさらば: イスラム女性の反逆』心泉社.
- 藤山正二郎, 2002, 「ジェンダー・イスラム・社会主義——ウイグル社会における女性の社会的地位」『福岡県立大学紀要』10(2): 1-13.
- ブハーリー, 1993, 『ハディース: イスラーム伝承集成 中巻』中央公論社.
- 米寿江・尤佳, 2004, 『中国伊斯蘭教』五洲伝播出版社.
- 馬啓成, 2006, 『回族歴史与文化暨民族学研究』中央民族大学出版社.
- 馬興東, 2002, 『回族文化史』雲南民族出版社.
- 馬国柱・虎有澤・張玉玲, 2004, 「黄土高原上の民族家庭研究—以張家川回族家庭為例」『西北民族大学学報』5: 152-156.
- 馬蘭, 2001, 『西部忠魂』銀河出版社.
- 馬麗蓉, 2005, 「西方伝媒語境中伊斯蘭婦女問題文化辨析」『回族研究』4: 5-12.
- 三田了一(訳), 1983, 『聖クルアーン: 日垂対訳注解』日本ムスリム協会.
- 柳橋博之, 2001, 『イスラーム家族法: 婚姻・親子・親族』創文社.
- 吉澤夏子, 1993, 『フェミニズムの困難: どういう社会が平等な社会か』勁草書房.
- 羅蘇文, 1996, 『女性与近代中国社会』上海人民出版社.
- 李小江, くずめよし(訳), 1995, 「社会改革における中国女性の地位と役割」『アジア文化研究』21: 23-37.
- 梁向明, 2007, 「略論回族伝統家庭倫理思想」『回族研究』1: 37-44.
- 労働問題リサーチセンター, 1995, 『女性の地位指標: 女性の地位指標に関する研究会報告』大蔵省印刷局.
- 呂耀軍, 2006, 「伊斯蘭世界女権主義及婦女運動」『中国社会科学院研究生院学報』5: 54-60.
- Lu Hai-qi, 宇田川拓雄(訳), 2003, 「経済, 社会, 政治活動における中国女性の地位に関する一考察」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』54(1): 77-85.
- Roxianguli Abulimiti・岩元泉・坂爪浩史, 2005, 「中国新疆ウイグル自治区における農村女性の地位と役割」『鹿児島大学農学部学術報告』55: 37-53.
- 2003, 「シリル・エバディ 本年度ノーベル平和賞受賞決定(話題のひとに迫る人物交差点)」『中央公論』118(12): 32-33.
- インターネット資料
<http://www.arachina.com/map/gansu/index.htm>
 (2007年2月18日参照)
http://www.lx.gansu.gov.cn/Article_Index.asp
 (2006年6月1日参照)